序

小此木政夫教授がこの三月末日をもって慶應義塾を退職される。小此木教授は長年法学部を代表する教員として慶應義塾と法学部の研究と教育にご尽力されるとともに、慶應義塾にあつては評議員、理事、地域研究センター（現東アジア研究所）所長として、学部にあつては法学部長、法学研究科委員長として、慶應義塾と学部の運営や行政にも大きな成果を残された。そして小此木先生の何よりも大きな貢献は、戦後日本における朝鮮半島政治外交研究の第一人者として、わが国と慶應義塾におけるこの分野の先導と確立に歴史的な足跡を残されたことである。平成二一年度、慶應義塾は小此木教授のこうした功績を称えて最大の榮譽である福澤賞を授与した。

小此木先生の研究者としての歩みは、戦後日本の朝鮮半島政治外交研究の発展の軌跡でもあったといつても過言ではない。戦前の歴史もあり、朝鮮半島の政治外交研究はあまりに政治的で、タブーの多い分野であり、客観的に朝鮮半島の政治を見ることはおろか、韓国へ行って政治を直接観察することすらイデオロギーによつて判断された時代である。そのような時代状況にもかかわらず、小此木先生は研究会（ゼミ）の指導教授であつた石川忠雄先生の勧めもあつて、朝鮮半島研究を志した。先生が大学院に進まれるのときをほぼ同じくして、当時、新進気鋭の国際政治学者であつた神谷不二先生が法学部のスタッフに加わつたことは、慶應義塾はもちろん小此木先生にとつても僥倖であつた。小此木先生は、石川、神谷両先生から地域研究と国際政治を吸収しながら、この二つの視座を融合させた独自の研究アプローチを確立された。一九八六年に発表された『朝鮮戦争―米国の介入

過程―(中央公論社)は、朝鮮戦争のプロセスを内戦と国際冷戦の両面から解明し、日本はもちろん米国や韓国の学界でも注目され、これにより研究者としての先生の名声は揺るぎないものとなった。先生は日本国際政治学会とアジア政経学会において長く理事を歴任されたのをはじめ、自ら先導して現代韓国朝鮮学会を創設され、現在では本学会賞は「小此木賞」と命名されている。

小此木先生といえば韓国留学について触れないわけにはいかない。先生は、一九七二年から七四年の二年間、韓国の延世大学に留学された。先生がソウルに渡られてすぐに朴正熙政権が維新体制を宣布して大学は閉鎖され、翌年には金大中氏拉致事件が起こるなど、当時の韓国はまさに激動の時代であった。先生は、当時の留学生生活を懐かしく語られることがあるが、大変なご苦勞をされたことは想像に難くない。戦車が大学キャンパスを取り囲むなかでの研究生生活である。しかしそのような生々しい体験をされているからこそ、先生の語る現代韓国朝鮮論からは常に地域研究としての醍醐味があふれ出るのである。

教育者としての先生は、学生の自主性を最大限尊重し、常に温かく接しておられた。しかし、それは決して自放任ではなく、論文指導では厳しい姿勢で学生に臨まれたという。小此木研究会は課題文献の多さで有名であったが、多くの優秀な学生が集う政治学科の看板ゼミのひとつであった。大学院にも先生の指導を求める学生が国内外から集まり、研究者として巣立ち、現在の学界・言論界を担う人材となっている。先生は教育者としても大きな成功をおさめられたのである。また、先生を慕って韓国から数多くの研究者、実務家、ジャーナリストが訪問教授または訪問研究員となり帰国後も関係を維持していることは、法学部にとって大きな財産となっている。先生は慶應義塾と延世大学の学術交流で中心的な役割を果たされてきた。今日、慶應義塾にとって延世大学は海外における最も重要なパートナーとなっている。延世大学キャンパス内には慶應ソウル・オフィスが設置され、両大学間ではダブル・ディグリー制度が実施されるに至った。とりわけ、法学部政治学科と延世大学政治外交学

科の関係は格別である。先生のイニシアティブにより、両学科は教員の相互訪問と定期学術交流会をこれまで二〇年間欠かすことなく毎年実施してきた。

われわれにとつての誇りは、先生の存在、役割が慶應義塾と延世大学との関係だけでなく、広く日韓関係全般にとつて必要不可欠であり続けてきたという事実である。例えば、日韓両国の学術交流は、一九九六年に発足した「日韓共同研究フォーラム」(一九九〇五年)の活動によつて飛躍的に発展したが、先生は同フォーラム日本側座長として両国研究者による共同研究を成功に導かれた。その後も日韓間で「歴史問題」が起るたびに、第一期日韓歴史共同研究委員会(二〇〇二～〇五年)日本側副委員長として委員会を実質的に組織して報告書をとりとまとめ、最近も、「日韓新時代共同研究プロジェクト」日本側委員長としてプロジェクト活動をリードし、昨年一〇月に両国政府へ報告書を提出されている。

これらの共同研究に加え、日韓間の政策対話における先生のご活躍にも目を見張るものがある。「日韓フォーラム」(一九九三年)では、日本側運営委員としてフォーラムの企画・運営を主導されるとともに、二〇〇二年日韓ワールドカップ共催や羽田・金浦空港シャトル便の実現に向けた政策提言を行つてこられた。韓流ブームや羽田空港国際化に先立って、日韓シャトル便開設を主張された先見の明には感服するほかない。先生の御尽力がいかほどのものであったのかは、関係者のあいだで羽田・金浦便が「小此木便」と呼ばれていることから容易にうかがい知ることができる。日韓文化交流会議(一九九九～二〇〇八年)においても、先生は日本側副座長として両国間の国民・文化交流の促進に積極的に取り組まれてきた。このように、福澤諭吉が夢見た日韓連帯は小此木政夫によつて実現したといえよう。

私個人にとつて、小此木先生は石川忠雄研究会の兄弟子である。小此木先生とは一九七六年に私が大学院に入學してからのお付き合いである。それ以来三五年、振り返ればわれわれの関係が気まづくなつたことは一度もな

い。それは八歳も年が離れた生意気な私を優しく受け入れ、最良の先輩として後輩の私の研究者としての成長を見守り、道を作ってくださったからである。中国研究者はときに中華思想に染まり、中国以外が見えなくなる。私の場合は朝鮮半島政治外交に少しだが土地勘を持ち、同時に非常に多くの韓国人に知己を得ることができた。これは小此木先生なしに不可能であった。思いがけなくも、法学部長も小此木先輩から受け継ぐことになったが、石川先生が亡くなる直前、二人で病室を訪れ、視覚を失った先生に小此木先生が優しく手を取りながらそのご報告を行った。石川先生の目からは笑みと涙がこぼれていた。それは美しい光景であった。

われわれの最大の名誉であり誇りである小此木政夫先生のご退職を迎えるのはもちろん寂しい。しかし法学部には、小此木先生の後継として、西野純也准教授と磯崎敦仁専任講師という二人の有望な次世代研究者が育っている。それに先生が慶應義塾を離れたとしても、これまでと同様にこれからも、われわれは先生のご活躍をありとあらゆる場面で拝見できるように違いない。日本にとって朝鮮半島との関係はますます重要な意味を持っており、先生の経験と知見が今まで以上に必要とされているからである。

先生のより一層のご活躍とご健康を祈念して、本号を謹んで進呈させていただきたいと思う。

平成二二年一二月

法学部長 国分良成